

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2023

課題番号：16K02464

研究課題名(和文) 古典修辞学とグラマトロジーの協働 - 「書かれた声」としてのヒュー・ブレアの修辞学

研究課題名(英文) Classical Rhetoric and Derrida's Grammatology: rhetoric of Hugh Blair as a "written voice"

研究代表者

兼武 道子 (Kanetake, Michiko)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：30338644

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は2つの分野において遂行された。

- (1) ヒュー・ブレアの古典修辞学書 Lectures on Rhetoric and Belles Lettres をデリダのグラマトロジーとの関連において再評価した。デリダは古典修辞学の成立と発展について、西洋形而上学から生まれ、その音声中心主義と存在論を補強したと述べているが、この指摘は正確とはいえない。むしろブレアの修辞学は「書かれた声」の学としてデリダのグラマトロジーに接近する視点を持っていることを明らかにした。
- (2) 18世紀以降の英国におけるギリシア古典受容の一形態として、ヴィクトリアン・ヘレニズムと女性作家について研究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

- (1) 「書かれた声」としての修辞学と、デリダのグラマトロジーの関連についての研究は、研究代表者の知る限り存在しない。この大きな問題系の一側面を明らかにできたのではないかと考えている。
- (2) ヴィクトリアン・ヘレニズムについての研究は、国内ではそれほど盛んでないように見受けられる。幾人かの女性作家の作品について論考を発表できたことには、ある程度の意義があると思っている。

研究成果の概要(英文)：This research project was conducted under two phases.

- (1) I elucidated the significance, achievements and theoretical possibilities of Hugh Blair's Lectures on Rhetoric and Belles Lettres in relation to Derrida's Grammatology. Derrida argues that classical rhetoric started as a branch of metaphysics, and that rhetoric helped consolidate the phonocentric and ontological determination of the Western metaphysical tradition. However, if we read Plato and Blair closely, we understand that Derrida's point is not entirely supportable. Rather than participating in the metaphysical determination, Blair's rhetoric, which realises Plato's description of rhetoric as a written voice, shares a number of insights with Derrida's Grammatology.
- (2) I studied Victorian Hellenism as a form of classical reception in post-eighteenth-century Britain, and wrote some pieces on how women writers reacted to this ideology.

研究分野：英文学

キーワード：古典修辞学 プラトン ヒュー・ブレア デリダ グラマトロジー ヴィクトリアン・ヘレニズム

1. 研究開始当初の背景

プラトンの『パイドロス』では、哲学がディアレクティケーを实践する「声」、修辞学がイソクラテスによって代表される「書かれた声」として表現され、この2つが互いを規定しつつ分化して成立する、同時発生的なものであるように描かれている。しかしデリダは、古典修辞学の成立について論じるにあたり、修辞学は形而上学から派生したものであり、西洋形而上学の音声中心主義や存在論的な伝統を継承し、強化する役割を果たしてきたと述べる。しかしこれは古典修辞学の成立の観点からしても、また時代を大きく下った18世紀英国の修辞学の実情に照らしてみても、全面的に正確とはいえない主張である。このことを論じた研究は、研究代表者の知る限り存在せず、また、声と文字という問題系において明らかな親和性を持つ修辞学とデリダの哲学を結びつける研究手法も発展しているとは言いがたい。

上記と並行する形で、代表者は、18世紀以降の英国におけるギリシア古典文芸の受容にも興味を抱いてきた。特に、ヴィクトリア時代の英国を古典期アテネに重ね合わせて表象するヴィクトリアン・ヘレニズムのジェンダー構造に関心を持っている。

2. 研究の目的

古代ギリシアにおける古典修辞学の発生と成立、また18世紀英国における古典修辞学の展開と継承について、デリダの哲学テキストで修辞学がいかに関与しているかを検証することを第一の目的とした。さらに、「書かれた声」としての修辞学という定義を基盤として、古典修辞学とデリダのグラマトロジーがどの点において類似し、いかに協働しているかを明らかにするよう努めた。

上記と並行して、ヴィクトリアン・ヘレニズムについての研究も遂行した。ヴィクトリア時代の英国においてエリート男性によって占有されていた古典学の伝統に対して、女性文学者たちがいかに反応し、アマチュアとして外部より貢献することによってギリシア文芸の豊かな受容に参画していたかを、個々の作品を検証することで明らかにした。

3. 研究の方法

2つの分野における研究を並行して行った。具体的な方法は以下のとおりである。

- (1) プラトンの『パイドロス』、デリダの“Plato’s Pharmacy”と関連文献を精読し、「声」としての哲学と「書かれた声」としての修辞学の成立について論点を整理する。
- (2) ヒュー・ブレアの *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres* とデリダの“White Mythology”、*Of Grammatology* と関連文献を精読し、西洋形而上学の音声中心主義と存在論的伝統における18世紀英国の修辞学の位置づけを明らかにする。
- (3) ブレアの *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres* が18・19世紀の英国に与えた広範なインパクトを文献学的な見地から明らかにし、「書かれた声」としての修辞学が、学問としての英文学研究の成立にいかに関与したかを精査する。
- (4) ヴィクトリアン・ヘレニズムの特性を探り、ヴァージニア・ウルフが小説 *Jacob’s Room* とエッセイ“On Not Knowing Greek”でその伝統に対してどのように反応したかを明らかにする。
- (5) ヴィクトリア時代の詩人オーガスタ・ウェブスターがギリシア神話・ギリシア悲劇に登場する女性人物たちをどのように描き、ドラマティック・モノローグの形式で彼女たちに何を語るることによって男性中心主義的な伝統を持つ分野において女性の視点からの言説を紡ぎ出したかを明らかにする。
- (6) 現代の英米の女性小説家たちがギリシア神話・伝説にどのような解釈を加えた作品を発表しているかを把握する。

4. 研究成果

(1) 古典修辞学は、その発生において形而上学から派生したのではないこと、またデリダが主張するように存在論的・音声中心主義的な意味の充足性を必ずしも指向したものではないことについて考えをまとめ、国際学会で発表を行った。

(2) ヒュー・ブレアの修辞学とデリダの修辞学論について検討を行った。アリストテレスの比喩論をめぐったブレアの指摘について、デリダは、形而上学的・存在論的な支配・階層構造を確立するのに貢献したと述べている。しかしブレアによる指摘を彼の論考の文脈に戻して考えてみれば、この批判は当たらず、むしろブレアはデリダが主張するのとは反対に、存在論的に上位にあるという *phone semantike* よりも、*phone asemos* の方を重視する立論を展開しており、その意味においてデリダのグラマトロジーに接近した考えを持っていたことが分かる。また、ブレアは比喩を、言葉の「固有」な意味という管理的な視点からの不在・ずれ・逸脱として捉えていたの

ではなく、比喩は使用されることによって徐々に「固有」な意味を形成し、獲得してゆくのだという考えを持っており、創造的で文学的な表現を高く評価していた点においてもデリダと共通するところがある。このことを論文にまとめ、大学紀要に発表した。

(3) プレアの *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres* は、18・19世紀の英国とアメリカにおいて、修辞学書としては異例なほどの高い注目と関心を集め、無数のエディションや縮尺版などへと編集されて発行され、次々に版を重ねた。これにとどまらず、プレアの修辞学・文体論はアンソロジーにも抜粋の形で盛んに収録されて、「書かれた声」としての説得術という修辞学の考えを、一般読者だけでなく、当時成立しつつあった英文学教育・研究の場に広く展開することに大きく関与した。そのことを文献学的な見地から考察し、論文にまとめた。成果は2024年度に大学紀要に発表する。

(4) ヴィクトリア時代の英国において、パブリック・スクールからオックスフォードとケンブリッジの両大学へと進学してゆくエリート男性のみがギリシア語の体系的な知識を習得し、古典期アテネのような「男のクラブ」としての帝国を作っていたことを、ヴァージニア・ウルフは *Jacob's Room* で批判している。ヴィクトリアン・ヘレニズムを体現する主人公ジェイコブを語り手は皮肉とユーモアを交えた筆致で描く。そのことをまとめ、著書『ノンフィクションの英米文学』（共著）の中の1章として発表した。

(5) ヴィクトリア時代の女性としては珍しくギリシア悲劇を翻訳した詩人オーガスタ・ウェブスターは、キルケーとメデアというギリシア神話に登場する女性2人を題材としたドラマティック・モノローグを書いた。“Circe”はテニソンのマリアナのような「待つ女性」，“Medea in Athens”は「家庭の天使」という、それぞれヴィクトリア時代の代表的な女性の類型を部分的に踏襲する形で描かれ、いずれの人物もそれらの類型を逸脱することによって主体性を獲得するように描かれている。このことをまとめ、オンラインで開催された国内学会で発表した。

(6) ヴィクトリア時代の詩人クリスティーナ・ロセッティの中編作品“An Old-World Thicket”を論じた。この作品は、従来、「偉大なロマン派の抒情詩」の系譜に連なる作品として解釈されてきたが、そこに描かれている自然は、ロマン派的な個別性・具体性を決定的に欠いた類型的ともいえる表現を用いて描出されており、むしろ古典古代の文芸以来の「ロクス・アモエヌス」や「混樹の森」の伝統に属しつつ、その書法において象徴主義にも接近しているのではないかということ、著書『自然・風土・環境の英米文学』（共著）の1章としてまとめ、発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Michiko Kanetake	4. 巻 128
2. 論文標題 Towards a Rhetorical Grammatology: Jacques Derrida and Hugh Blair	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 紀要 言語・文学・文化（中央大学文学部）	6. 最初と最後の頁 15-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 兼武 道子	4. 巻 -
2. 論文標題 オーガスタ・ウェブスターとギリシア神話の「悪女」たち	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本英文学会第92回大会Proceedings（オンライン）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 兼武 道子
2. 発表標題 Christina Rossettiの"An Old-World Thicket"を読む
3. 学会等名 中央大学人文科学研究所
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 兼武 道子
2. 発表標題 オーガスタ・ウェブスターとギリシア神話の「悪女」たち
3. 学会等名 日本英文学会第92回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 兼武 道子
2. 発表標題 Augusta Websterの"Circe"を読む
3. 学会等名 中央大学人文科学研究所
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 兼武 道子
2. 発表標題 Augusta Websterの"Circe"を読む(2)
3. 学会等名 中央大学人文科学研究所
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 兼武 道子
2. 発表標題 Rhetoric of Unity or Division? Derrida on Hugh Blair
3. 学会等名 Rhetoric Society of Europe (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 富士川義之 編、兼武 道子 分担執筆	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 464
3. 書名 『自然・風土・環境の英米文学』、「クリスティーナ・ロセッティと『象徴の森』」	

1. 著者名 富士川 義之 編、兼武 道子 分担執筆	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 438
3. 書名 『ノンフィクションの英米文学』、「ヴァージニア・ウルフとギリシアーギリシア旅行日記と『ジェイコブの部屋』」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関